

◆玉名高校創立110周年記念講演会「元気出そうよ」 下川 高士氏(高25卒)

1 時間 11:30～12:40

2 プロフィール

1954年生まれ。小学校3年生の3学期に東京から玉名市高瀬町へ転居。玉名町症、玉名中、玉名高を経て慶應義塾大学進学のため、再び上京。卒業後は(株)ヤクルト本社勤務を経て、1979年に学習塾「進学補習教室ブルカン塾」を開設。いじめ・校内暴力などに悩む子どもたちとの出会い、採算度外視の生徒指導を行う。ボランティア化した同塾の経営基盤確立のため、1984年ラーメン店「九州じゃんがら」を開業。関東に豚骨の味を普及させた功労者となる。

「ブルカン塾」は単なる学習指導にとどまらず、子どもたちの人間力を育成する独自の教育方針を持ち、「青春講座」と称する独自のカリキュラムを実践。

「九州じゃんがら」は東京有数の繁華街に7店舗を展開。また、表参道にレストランバー、文化交流倶楽部「パール・デ・じゃんがら」を営業。

著書「元気を出そうよ」「もっと元気を出そうよ」は法務省矯正局により全国の更生施設に配本された。



3 講演要旨

「素晴らしい母校で講演できることは光栄です」と話され、ご自身のこれまでの経験をもとに、時折ユーモアを交えながら始まりました。

①訪れたチャンスは逃さない

小学校の時に玉名に来たときはカルチャーショックがあったが、今の私の原点は玉名中、玉名高で過ごした6年間である。玉名高ではこれまでの人生の中で一番悔しい思いをし、だから遠ざかっている時期もあった。でも、後輩の君達だから今日は話したい。それは、高校3年生の時、応援団の団長に周囲から推挙され有頂天になっていた時、叔父から「そんなことをやる時期ではないだろう、受験だろう」と言われ、一晩悩み団長を降り、総責をしたこと。最終的には優勝したものの、心が沈んでいた。団長としてのチャンスを生かせなかった自分自身への複雑で深い思いと悔しさが残っている。その時に「訪れたチャンスは逃さないこと」を学んだ。

②かけがえのない親友

大学時代は楽しかった。ヤクルト本社時代には大変感謝している。妻と出会い、仕事で子供とまみれ、健康への意識が高まった。玉高の2年次の同級生の坂田君に相談し、自分の立場を捨てて一緒に塾を立ち上げた。玉名高でかけがえのない親友を得た。ブルカン塾を始めた頃は教室で寝泊まりする生活で苦しかったが、充実していた。学校の先輩やヤクルトの方が応援してくれ、とても感謝している。

③転機

頑張る生徒や家庭環境が厳しい生徒からはお金は取れない。空いている時間に何をするのか。玉名に住んでいたから、ラーメンを出そう。大切な保証金400万円を山手線の電車に忘れたが、発見された。「大切なものは肌身離さず」「確認は大切」など何事も勉強である。塾とラーメン店の組み合わせはメディアにも取り上げら

れた。芸能人の方、スタッフにつくことも。その経験は様々な世界が見え、勉強になる。それが幸せ。

④自分が変わる

幸せの要素は何か。「経済的富裕」「円満な人間関係」も大切だが、「心身の健康」は特に大事。では、元気を出すためのコツは「自分が変わること」。そして、いい気は必ず周りに伝わり、広がり、周囲が元気になる。どうしても、何事もうまくいかない「周りが悪い」と考えてしまう。不安やいらつきは環境のせいではない。その考えを変えよう。

自分が変わるためには「いい気を表現しよう!」(狭い道での出来事も、気持ちのいい言葉掛けで相手が変わる)、「どちらがプラスになるのか選ぶ自分になる!」(何事も選択の場面では自由である。プラスになるのは何かを考える)、「良かった探しをする!」(コップの水も「これだけしかないのか」と「こんなにある」では違う)。「良かった探し」で見方は変わる。

人は人生を楽しむために生きている。決して苦しむためではない。だから、自分が変わればもっと人生を楽しむことができる。「確認は大切」とわかっていても大事なことを忘れてしまう。だから、迷ったら、カバンや部屋を整理する。そして、頭の中をシンプルにして、そこに「プラス」を入れる!。ぜひ実行して下さい。

⑤今でしょう!

マレーシアの実業家の友人は「情熱」が大切でなく、「Passion with action(情熱を持って行動)」が大切という。思い立ったら行動に移す。今流行の「自分を変えるなら 今でしょ!」の言葉はとてもいい。結果が悪くても腐らない、「自分を変える」これが大切。

これまでの経験や失敗談なども交えて具体的に話され、玉名高での思い出話では在校生へのエールが感じられました。聞かされた「自分が変わる」「元気が出る」と感じる講演でした。

※ ブルカン塾のホームページに「玉名中・高の皆さんへ」として、講演会の内容のまとめが掲載されています。下記のリンクから是非ご覧ください。

・ブルカン日記

◆平成25年度 第1回キャリア教育講演会

中学校1・2・3年、高校1・2・3年・卒業生・職員・保護者対象

- 1 日時 平成25年7月3日(水) 3・4限 (10:55 ~ 12:40)
- 2 講師 C. W. ニコル(シーだぶるにこる)氏 (作家)
- 3 演題「人と自然との共生」
- 4 プロフィール・講師職歴・経歴

英国南ウェールズ生まれ。17歳でカナダに渡り、その後、カナダ水産調査局北極生物研究所の技官として、海洋哺乳類の調査研究に当たる。以降、北極地域への調査探検は12回を数える。1967年より2年間、エチオピア帝国政府野生動物保護省の猟区主任管理官に就任。シミエン山岳国立公園を創設し、公園長を務める。1972年よりカナダ水産調査局淡水研究所の主任技官、また環境保護局の環境問題緊急対策官として、石油、化学薬品の流出事故などの処理に当たる。1962年に空手の修行のため初来日。1980年、長野県黒姫に居を定め、執筆活動が続けるとともに、1986年より、荒れ果てた里山を購入し、『アファンの森』と名付けて再生活動を始める。2002年、『アファンの森』での活動や調査等をより公益的な活動を全国展開するために、「財団法人C.W.ニコル・アファンの森財団法人」を設立し、理事長となる。著書に、『りんごの花さく湖』『ティキシー』『勇魚』『TREE』『魂のレッスン』『誇り高き日本人でいたい』『遭敵海域』『裸のダルシン』『マザーツリー～母なる樹の物語』他多数。



5 講演要旨

副校長の講師紹介の後、C. W. ニコル氏が体育館ステージに登壇され、「こんにちは、黒姫の赤鬼です！」と開口一番に言われると、会場はなごやかな雰囲気につつまれた。ニコル氏は現在73歳。日本で過ごす51年のうち、30年間を長野県黒姫で森づくり携わっている。

「なぜ日本に来ることになったのか」

ニコル氏は、12歳のころに見たドキュメンタリー映画で北極圏に住む人々に憧れ、いつか行ってみたいと夢見ていた。高校時代の生物の先生(その後、学校をやめ、カナダに移った)から、17歳の時に、北極の調査に誘われ、両親には真実をつげないまま、8か月間北極の調査に加わった。この滞在で北極の大自然と調和して生きるイヌイットの暮らしに魅了されたことが、その後のニコル氏の生き方に大きな影響を与えた。カナダ水産調査局時代には、海洋の哺乳類の調査研究にあたり、北極への調査探検も多数回に及んでいる。また、ニコル氏は、ウェールズの出身で、中学時代、同じウェールズ人の友人が3人しかいないことから、いじめられていた。強くなりた一心で、柔道を始めたが、日本人柔道家の小泉軍治先生と出会い、真の武道というものを教えられる。「小泉先生と講道館で乱取りをしたい」というのが、それ以来ニコル氏の夢となった。さらに、そのころまだ英国では教える者がいない空手をやるために、22歳の時に日本に行くことを決心した。

「日本の森との出会い」

英国では、国土のわずか5%の森は貴族の獵場であり、庶民にはその恩恵を受ける権利はない。それとは対照的に日本の森は、国土の67%を占め、どんな人にもあまねくその恵みを与えている。そのことに、ニコル氏は感動した。森の大切さは、その後赴任するエチオピアでも痛切に感じたことだった。数か月間、干ばつが続いても森があれば、砂漠にはならない。「近代化とともに、破壊されていく日本の森を復活させたい」と考えたニコル氏は、壊れかけた森を買い、時間をかけて復活を実現させていく。その様子を収めたDVDを生徒たちは、食い入るように見入っていた。氏が設立した「アフアの森財団」は現在9万坪の森林を復活させてきている。(アフアとは‘風の通る’という意味である)

「森には癒しの力がある」

虐待を受けた子供たち、地震や津波で家や家族を奪われた人たちを森に招くと、ほんの3日間の滞在なのに、笑顔が戻ってくる。森には、それほどの癒しの力があることに気づいた。また、こういったつながりから、現在は、被災した東松島市で森の復活に取り組んでいる。アフアの森の種が東北に飛んだと思っている。小学校を高台に建てるには、まだ3~4年かかるが、自分が何のために日本に来たのかわかったと思う。最初は格闘技のために来たが、たくさんの人に出会い、大きな夢が広がった。「まわりの人の話に反応して、わからないことは聞いて、その人が返事できなければ、できる人を紹介してくれるから！未来はあなたがたのものです！」この言葉でニコル氏は1時間30分の講演を締めくくった。

「質疑応答」

Q1 森の復活のために、自分たち高校生はどんなことができるか。

A1 NPOやNGOが森を守る活動を色んなところでやっている。色々調べて、賛同できるものに参加するとよ

い。「アフアの森」に参加してくれると嬉しいな。

Q2 どうすれば、自分の夢がかなえられるか。

A2 「心を先に行かすこと。」絶えず思い続けていれば、いつか必ずチャンスが訪れるから、その時を逃さないようにしよう。反応し、質問し、何事にも積極的に！

Q3 異文化と触れることのメリットは？

A3 知らないものを知ることは、ほんとに楽しいと思う。言葉ができないとか、あれが、食べられないとか、言わない方がいい。他の文化を学ぶと自分の文化が何かわかる。

Q4 ニコル先生の今の夢は？

A4 復興のために14mの防波堤を作ったり、川にコンクリートの壁を作ったりしているが、自然にチャレンジするような無駄はやめて、自然を理解し、自然と共生していくべきだ。これは、50年間の私の経験から言っていること。本当のエキスパートのことを聞いていれば日本はエデンの園になれる。地域の森を守ることから始めればそれはやがては日本中に広がり、国を動かすリーダーになる人が現れてくると思う。

